

「日本人論」や「ジャパノロジー」の話説、すなわち「集団志向」や「独創性欠如」や「タテ社会」というのは、すでに百年以上にわたって続けられてきた近代批判や大衆社会論の一変種であるということでもある。ここから考えると、「日本人論」や「ジャパノロジー」

というのは、論者たちが自分の社会の醜い側面を「日本」に投射する議論、つまり大衆社会論の人種差別的な変種であると考えることができる。さらにいうならば、人種差別的な精神構造が近代のもたらした醜悪さに対し示してきた典型的な反応であつたともいえる。このことは日本国内について考えれば、さらに別の問題に行き着くことになる。それは近代社会通有の病弊をなぜか自國に独占しようとし、「歐米」を無闇に理想化するといつ自虐的な精神構造である。この意味で「戦後日本」は「重の病弊を抱えてきたといえる。

原風景はどこに

東洋史学専修 近 藤 一 成

モンロー宣言以来、極端な引きこもり、そうでなければ棍棒外交と、コインの表裏のような対外関係を一貫して繰り返すアメリカと理解していたが、かれら個人の対外認識という場面になるとなかなか豊かな内容に満ちている、というのが本日のお二方の報告を拝聴した率直な感想である。報告テーマについてまったくの門外漢としては、その豊かな内容に立ち入る能力は無く、やむを得ず議論の枠

組を拡大し、アメリカの日本認識あるいはアジア認識の原風景はどうにあるのか、という質問でコメントに代えさせていただきたい。その質問の意味を以下に少し説明することで、コメントーターの責めが塞げればと願う。

周知のように、ヨーロッパの中国認識が本格的に形成されるのは、一六世紀に入華イエズス会士の中国情報が大量にもたらされるようになった以降である。それらの情報は、イエズス会士の中国宣教を可能にし、かつ発展させる目的に沿う形でのバイアスが意識的無意識的にかかり、それらを受け止めるヨーロッパ側の人々にも、かれらがヨーロッパで置かれた立場によって中国賛美から批判に至る解釈の変遷があるが、一八世紀にはヨーロッパとくにフランスでのSinology の確立を見ることができる。こうした事態を、二〇世紀の研究は、「西学東漸」「東学西漸」と理解し、文化交流史として多くの学術成果を挙げてきた。やがて一九世紀のイギリス帝国は、Sinology とは別の Chinese Studies を成立させることになる。それはイエズス会士と異なる、冒險商人や外交官、プロテスタント宣教師などの中国情報に基づく中国認識であり、かれらの活動の場が主に南方の沿岸地域の海港であつたことから、その土地の中国人や地方官僚との接触で得た情報によつた点が特色となる。従つてかれらが最初に習得した中国語は福建語や廣東語であり、Chinese Studies は実務的、世俗的傾向を色濃くもつ。ヨーロッパの中国認識の原風景とは、Sinology や Chinese Studies の一一の要素から

構成されていたと言えるであろう。

最近、『清代禁書の研究』『近世中国の比較思想—異文化との邂逅—』（一九九六、一〇〇〇 東大出版）を上梓された岡本さえ氏は、両大著のなかでヨーロッパと中国それぞれの他者認識について比較し興味深い見解を提出している。それは明代中国における「西学」研究の盛行であり、一七世紀前半だけで数千種類の西学関係の書物の出版が確認できるという。いわばこの時期、中国で初めて体系的な異文化が中国文明の内部に入り込み、本格的な異文化交流の芽が出てと評価する。しかし清朝は、その芽を押しつぶす。確かに礼と義にその本質を置く中華とは、漢族の独占物ではない。だが論理的にはそうであっても、あるいはそうであるが故に絶対少数者の非漢族征服王朝である清は、過剰なまでに中華への自己同一化を志向し、中華思想の正統な継承者であることに汲々とした結果、中華以外の文明に目を向ける余裕はなくなつた。その上、絶対多数者への恐怖からくる漢人に対する思想弾圧は徹底的であり、乾隆帝の一五万部に及ぶ禁書はその総仕上げとなつた。こうして一七世紀の対外危機に「比較意識」が研ぎ澄まされた明朝知識人たちの異文化への興味は、その成果が抹殺されたのみならず、かれらの後継者も根絶やしにされた。一九世紀半ば、東西文明は、互いの他者認識の質と量において徒ならぬ格差のなかで出会うことになる。

岡本氏は、ヨーロッパの中国認識の集大成として一八世紀のエズス会士デュアルド『中華帝国誌』をあげる。Sinologyとしての

それにまったく異存はないが、Chinese Studies の集成としては、一八二〇年に初版が出され、一八五七年の第七版まで改訂増補を繰り返したイギリスのフランシス・デーヴィスの『中国』があげられるであろう。デーヴィスはイギリス東インド会社書記から出発、香港総督にまでなった人物であり、二卷九〇〇頁以上の本書は近代英語圏の中国觀を方向付けた。実は、この本と近似した体裁の『中国王朝』二巻が、一八四八年、ニューヨーク・ロンドンで刊行され、こちらも版を重ね、一八八三年には増補改訂版が出版されている。著者はアメリカの宣教師・外交官のウェルズ・ウイリアムズであり、帰国後、エール大学の中国語・中国文学の初代教授に就任した。この講座がアメリカ中国学の始まりである。

今、手元にある一八四一年ロンドン刊の『中国遠征六ヶ月』という小さな本をみると、これがアヘン戦争に従軍した軍人の、広東からボンベイへの帰還航海中に書かれた手記であることが分かる。まだ戦争も終わらない時期の緊急出版であり、しかも第三版である。また、この本の中表紙には、『一九世紀日本人の作法と慣習…近年のオランダ人訪問者とドイツのフォン・リーシーボルトの報告から』只今刊行中、という広告が載せられている。一九世紀中葉のこうした英語圏の一般社会のアジア認識を考えるとき、ではアメリカの日本認識の原風景はどこにあり、それは、現在のアメリカアジア学とどう繋がるのかあるいは繋がらないのか、お聞きしたくなるのである。